

## 孤独感にはゴハンが効く！ すべての子どもや若者へ向けた食の安全保障

企画委員会「若者と食」タスクチーム

いままぜ「食」支援が注目を集めているのでしょうか。一つの背景として、「子どもの貧困」という問題がクローズアップされた中で、「どうも豊かに食べていない子どもがいる」という現場で関わる人達の実感があります。そこで、次の展開として食に関わる支援の必要性が急速に認識されるようになってきていると見えるのです。人間が生きていくためにベーシックな部分の支援の必要性を感じ、理事会を補佐する企画委員会で「若者と食」タスクを立ち上げ、取組みを始めました。すべての子どもや若者に「フードセーフティネット」を。飽食の時代といわれる現代にもかかわらず、孤食、貧食、ぼつち飯、など「食」をめぐる社会的課題は多様です。フードロスの問題もあります。このような状況のなか、地域で子どもや若者たちの食を支える取組みが広

がってきており、そのなかでもここ数年は「子ども食堂」が増えてきました。「子ども食堂」とは、①子どもだけで来て食べられる、②安価もしくは無料である、③交流機能がある、すなわち食を核としながら子どもが安心して過ごすことのできる場作りが行われていること、④栄養バランスの良い食事提供がベースとなる活動です。

企画委員会「若者と食」タスクチーム  
ユースワーカー 玉村文・横関つかさ

(※1) 誰もが安全で栄養のある食品を手に入れることができるしくみのこと。  
(※2) 「本来食べられるにもかかわらず廃棄される食糧の量」。500〜800万トンと試算されています。そのうちフードバンク活動を通じて流通された量は4500トンです(2013年)。

### 実践現場紹介



びあびあ食堂の様子

#### 大阪の事例

長期休みのお昼にだけオープンする「びあびあ食堂(大阪府箕面市)」。元々お昼ご飯を用意されない子どもたちの存在から始まったこの食堂では、現在平均35食程度、子どもから若者・大人までが一緒にご飯を食べています。「食卓を囲む」体験に乏しい子どもや若者たちに対して、ご飯を食べながらいろいろな人とやりとりを交わす「当たり前」の経験を地域が支える必要性を感じています。



#### 滋賀の事例

遊べる・学べる淡海子ども食堂  
滋賀県で今年度からはじまった「遊べる・学べる淡海子ども食堂」は、滋賀の縁創造実践センターのリーディングプロジェクトとしてすでに県内6カ所で開設されています。大きな特徴は単独の取組みではなく、3年後に県内200カ所(各小学校校区に一つ)開設という数値目標を掲げていることです。福祉施設、商店街、母子福祉会など様々な人の力を借りて様々なスタイルの子ども食堂が運営されています。

#### 京都の事例

市内各青少年活動センターで、「食」がもつコミュニケーションとしての面に着目し、「コミュニケーション」に苦手意識を感じている若者たちの「仲間めし」、地域の「やんちゃ」な10代に向けたオープンスペース・カフェなどを展開しています。こうした取組みでは、「食べる」というプロセスに若者が参画することを通して多様なかわりと相互作用を生み出しています。何を食べるかではなく、誰とどのように食べるかに焦点を当てた取組みです。



山科青少年活動センタープログラム  
平成23年8月23日京都新聞掲載



淡海子ども食堂の様子

格差社会といわれるなかで、経済格差ばかりでなく学力格差も注目されてきました。学力は数値化しやすい課題だったために可視化しやすく、学習支援という形で子どもや若者の貧困対策として注目を受けてきました。しかし経済格差は学力以外にも子どもや若者の成長に大きな影響を与えており、その一つが今回特集した「食」に関わる格差と貧しさという問題です。地域のつながりがあった時代には、近所で一緒に食べさせてもらうとかお裾分けを近所に配るなど自然発生的に食を助け合う文化がありました。また実践レポートにもあったように京都市でのユースワークプログラムの中に食を使った居場所プログラムは前から位置づけられています。「食べる」ことは生きていく上で不可欠であるからこそ、食をキーワードにした事業はこれからますます広がっていくことが期待されます。

食の支援は様々な形で幅広い市民がボランティアとして参加できる可能性を持っており、子ども食堂だけに留まらず様々な事業が考えられます。例えば大学などの学食とコラボして地域の子どもの居場所づくり、商店街でよく行われるバルを子どもや若者向けにアレンジし日常化した屋台村など。考えれば考えるほど夢や期待が膨らむ「若者と食」をテーマにした事業。そのための具体的なアクションが今まさに動いています。



「若者と食」タスクチーム 幸重忠孝(企画委員)  
松村幸裕子(協合理事)